

AO・HANI

Social Welfare Organization Since 1991 Nara City Japan

2015 Jan 73号

Contents

Special

P2~P4

てしごと アート展2014

report

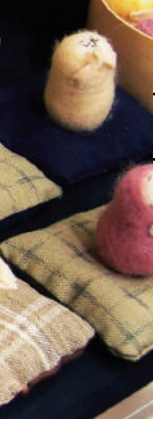
- P5 ・ 第35回アビリンピック全国大会出場！
・ 生駒事業所の現状
・ 自然学校通信

essay

- P6 一寸の虫にも五分の節目

information

- P8 ・ 2のあひる開設3周年
・ 青葉仁後援会より



特集

Special

アト展

2014

障害者クリエイティブデザイン



会場はまさに満員御礼 開催期間中のべ2,000人を大きく超える来客があった

期間最終日12月7日(日)には 障害者福祉啓発フォーラムを開催



今回『てしごとアート展』に合わせ、2階イオンホールで障害者福祉啓発フォーラム『ご存知ですか？ 障害ある方々の活躍の場が広がっています』を開催。今回初の試みとして要約筆記のスクリーンを置き、「だれでも」参加できるよう考慮した会場に、当初の予定を上回る来場者が集まりました。生駒市長の山下真氏、(株)モンベル広報部長の竹山史郎氏をお招きした鼎談では、これからの生駒山麓公園の目指す姿やできること、すべきこと等、それぞれの視点からの意見交換が行われました。また「いきいきと働き、豊かな人生をおくる」をテーマに行われた医療法人寿尚会洛陽病院中塚圭子氏の講演、青葉仁会の事業所より支援現場の現状の発表など、障害者の就労を支える取り組みを多くの人が知る機会となりました。





ディスプレイにもひと工夫

慣れた手つきで行う試食販売 動きに淀みがない

デリカテッセンイーハトーヴから就職された方々が、様々な職場で活躍されている様子をご紹介します。パンフレットが完成いたしました。ご入用の方は、青葉仁会の各事業所店頭（ハーブクラブ・デリカテッセンイーハトーヴ・クラムボン・満天ひろば）、またはお手数ですが以下までご連絡をお願いいたします。



多機能型事業所 デリカテッセンイーハトーヴ
〒631-0064 奈良市帝塚山南 4-11-14

TEL : 0742-95-7227

鮮やかな色が重なるフリース生地を背景に「再生」の二文字。遠くからも目を引くこのポスターが、2014年 てしごとアート展のお客様を迎えた。白と黒の二色でシックにラッピングされた製菓商品。種類の豊富なカレーの箱がびつたりと整列し、その隣には新商品のベジタブルポターージュや冷凍ビザが色とりどりの顔をのぞかせながら並ぶ。調子は揃っていても全く同じものはない手作りの陶製の器の中から、これぞというものを探す人。光沢のあるグラシン紙で一つひとつ丁寧に包まれた石鹸の前には、興味深げに香りを確認したりパンフレットを読んでいたりと、絶えない行列が伸びていく。自然学教室のスタッフも、今までの経験を生かした丁寧な説明で対応している。板についた接客と試食販売が、強力な武器に成長している。

何よりも人気なのは羊毛で作った人形。どんどん売れていく。「カワイイ！」とお客様の声があがり、それにつられて振り向く人もついつい引き寄せられていく。未年に向けた羊毛のヒツジ人形は、いかにもありがたそうな様子で真っ赤な座布団に座って微笑んでいる。これを作り上げたクリエイティブは一流の商人だ！

商品陳列用の特製カヌーに山と積まれた手触りの良いフリース製品は、それでも人垣に飲まれて時々見えなくなってしまう。子供用の帽子や、マフラーにブランケット。どれにもアウトドアの先登モンベルの生地の温かさと、手作りならではの柔らかな温かさが込められているようだ。

オープン前夜の搬入 陳列は今までになくスムーズに進行した。準備して

購入への原動力は成長した商品力

～ てしごとアート展ぶらり歩き ～

文・写真

多機能型事業所
デリカテッセンイーハトーヴ

水野 さゆみ

いた大型ポスターやパネルなどもそれぞれの商品に合わせた場所に設置。全体がまとまりいい感じだな、と見渡している。無い。法人の名前がどこにもない！ 主催者は誰なの!? 慌てて「社会福祉法人青葉仁会」のプレートを作ってもらい、当日の朝から目立つところに張って吊って。

しかしこの法人名のプレートがあってもなくても、売り上げには何も影響がなかっただろうとも思う。誰からも「障害者が作っているから買おう」という言葉は耳にしていない。障害のある方が作っていますという案内もしていない。購入への原動力は商品の力だった。年々商品力が上がり、今年では会場全てを自分たちの製品で埋めることが出来た。沢山並べた商品を隠す人垣に、並べても並べても売れてしまつて隙間が空く石鹸コーナー。売り

上げもすこぶる伸び、イオンモール大和郡山の方々にも良い印象を持ってもらえたのだろうかとはっとしている。

一年前に入手したデジカメは優れもので、私はなんちゃってカメラマン気分での大盛況の様子の端々を写真に収めていく。エスカレーターに乗って2Fへ。人が行きかう会場に向けて一枚。人波で遊園地のような売り場を見下ろしながらぐると一回りして3Fへと上る。今度はほんの少し小さく見える売り場全体がよく見える。

もう何回目か てしごとアート展だろう。買ってもらわなくてもこんなに大勢の人に作品や商品を見てもらっている。すこしにやけた顔で見下ろす私には誰も気づいていないようだ。

毎年恒例のイベントとなっている「てしごとアート展」。今年はイオンモール大和郡山という、週末には5万人もの来客数を誇る場所での開催ということで、客層を考えた新商品の提案を行ないました。縫製では親子揃って使えるようなフリースの巻きスカートやレッグウォーマー、紙漉きでは柿渋で染めた名札入れやポーチ、また定番の年始用商品についてもラッピングを新たに考案し取り入れました。手作り石鹸もシールのデザインを改め、ラッピングもリニューアルした今までになく高級感のある石鹸に仕上げました。その結果、見せ方一つでこんなにも違いがあるのか!という程、今年は例年の数倍もの売り上げがありました。お客様からも「一つひとつ丁寧に手作りされている感じが見てとても良いわ!!」と、お褒めの言葉を頂くことができました。

土曜日にはクラフトのメンバーを連れて見学にも行き、日頃自分達で時間をかけて作り上げた商品がお客様の手に渡る様子や、沢山のお客様がいるのを見て「いっぱい売れたねー!!」と、嬉しそうに話している様子が印象的でした。自分達の頑張りが売り上げという目に見える形になることで、より一層メンバーのモチベーションの向上にも繋がったのではないかと思います。今回のイベントでは、商品のラッピング、陳列へのこだわり売り上げ向上という目に見える形で結果に現れたことで、改めて商品の見せ方の重要性を認識しました。

満天ひろば 主任 近藤 直子 努力が形になる支援を

地域 支援部



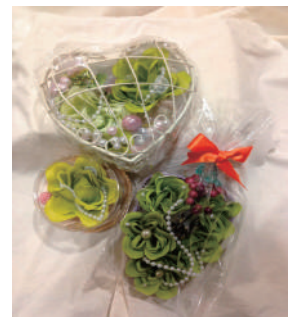
2のあひるのスタッフとグループホームのメンバーと一緒に、利用者の方もスタッフもそれぞれの思いでアート展を楽しみ、刺激をもらってきました。普段なかなか出逢えない人、懐かしい人にも会えました。



来年のてしごとアート展をどうぞお楽しみに!

ポラーノ広場といえば、裏山で集めた木の蔓、松ぼっくりなどの木の実に作ったリース、木のボタン、一針一針丁寧に思いが込められた刺繍たちなどがあります。集めた素材たちは利用者さんのセンスでぬくもりのある製品に変わっていきます。今回のてしごとアート展では新しい製品を出したいと考えていたところ、ちょうど利用者さんがフラワーアートを習った事がきっかけで、素敵な製品が出来ました。今回作ったフラワーアートは、果物の形をした籠に花の形をしたせつげんにビーズやレースを組み合わせ、思い思いに作りあげていきます。作っていく過程で利用者さんから「もっと作りたい」「リボンを巻いたりすると可愛くなると思う」「盛りがたりない!」などのアイデアや希望が出てきて製品があつという間に出来上がりました。他の作業をしている利用者さん達も「何が始まったの?」「何を作っているの?」と興味津々。色んな作業を分担して、最後には机を囲み団欒のようになって作り上げました。たくさんの可愛い商品が出来あがり利用者さん達の生き生きとした表情を見て、私たちスタッフも外に目を向け勉強しアイデアを出し合っって色んなことに挑戦していかなければならないと感じました。

シグナルから
新しい製品ができました。



ポラーノ広場
安田 章代



11月21日から23日の3日間、愛知県で開催される第35回アビリンピック全国大会に、私は、奈良県代表で出場する田中美映さんの引率で一緒に名古屋へ行きました。アビリンピックの競技種目は24種目もあり、その中の美映さんが出場する喫茶サービス部門は全員で42名の選手が参加され、一番出場人数が多い部門でした。その分、競技時間も長くピリピリと緊張感のある中で他の選手達に交じり、お客様のオーダーをとり、ドリンクを運び、テーブルを片付け、必死にお客様の対応をしている姿が、いつものハーブクラブで接客をするアットホームで柔らかい雰囲気的美映さんとは違い、一生懸命でとても素敵で格好良かったです。

競技終了後、競技を観覧していた方達の大きな拍手に、ピリピリした空気が和らぎ選手みんなが達成感と安堵感の笑顔に私はとても感動しました。名古屋で過ごした3日間は一生懸命に頑張った美映さんに心から寄り添えたように思い、自分の成長にも少し繋がったかなと、思っています。

水間ワークス 森本 千尋 第35回アビリンピック 全国大会出場！



生駒山麓公園での新しい取り組み

生駒山麓公園は、生駒山麓の山々に囲まれた大自然の中にあります。毎日、利用者さんは公園内をウォーキングして体を動かした後、レストラン・多目的広場・野外活動センター・テニスコートなどで、鳥のさえずりに耳を傾けたり、花や木の季節のうつろいを感じたりしながら整備やレストラン補助作業をしています。社会から必要とされ、仕事を通して成長し、自然の中で楽しみながらいきいきとした活動ができるように支援しています。

米作りを通して

生活支援部 自然学校
本間 知雄

自然学校 通信

自然学校ではブルーベリーやお茶、バジルの他に黒米や白米（コシヒカリ）の栽培も行っています。特に白米は一昨年から栽培を始め、今年度で2年目の収穫を終えています。作付け面積は約2反で、収穫量は約1トンと、まだまだ大規模とは言えません。耕作放棄地となった田んぼを自然学校の利用者さんが、草刈りから始め、冬の間は厳しい寒さに耐えながら、堆肥を運んで土作りを行い、春には田植え、夏は汗をかく、泥だらけになりながら田んぼに入って草取りに励み、実りの秋には鎌を持ち収穫を行います。最近ではその姿を地元農家の方が見てくださり、「よくやってるなあ」「がんばってるな」と声をかけてくださいます。利用者さんにとってはその言葉がとても励みになっています。また、年々作業スピードも速くなり、私の想像以上に早く予定の仕事が終わる時や、利用者さん

達の中でできる作業とできない作業を分担して取り組んでおられる姿を見て、農業（米作り）を通して利用者さんの成長を日々感じています。

日本は少子高齢化で農業従事者の高齢化が深刻な問題になっています。この青葉仁会本部がある地域も例外ではありません。1度耕作放棄地になってしまうと、田んぼや畑に戻すことは容易ではありません。また、農業にとって1番大切な水源が止まってしまう、景観もよくありません。

自然学校は米作りを通して、今まで以上に地元地域との繋がりを深め、信頼を得て、そうした耕作放棄地などを安心して任せさせていただけるような存在になりたいと考えています。それが地域の活性化や発展に繋がり、社会貢献の1つになると思います。



おいしいお米のご案内

自然学校が米作りをしているこの地域は、高原地で一日の寒暖差が激しく、空気が澄んでいて、山からの綺麗な水が流れる、米作りにとってはとても恵まれた環境です。その中で育まれたお米は風味、食感ともにひと味違う美味しいお米です。数量に限りはございますが、販売もしていますので自然学校までお気軽にご連絡ください。

あおはに自然学校（青葉仁会）
TEL：0742-81-0420

白米	5kg	→	1,900 円 (税込)
	10kg	→	3,800 円 (税込)
	30kg	→	11,000 円 (税込)
玄米	5kg	→	1,700 円 (税込)
	10kg	→	3,400 円 (税込)
	30kg	→	10,000 円 (税込)

一寸の虫にも五分の節目

青葉仁会理事長 榊原 典俊

師走の日めくりもあとわずかだというのに、まだあたたかく原稿に追われている。

これが出る頃はすっかり新年も過ぎてのことだろう。年内にやるべき事は済まされればと思っはいても、気持ちと時間は別物。また事の成就とも別物。頭と心も常に別物。「時の流れに身を任せ」は唄のなかだけ、このままでは今年もやり残した事に囲まれて終わりそう。いつそ身軽にと、新年に逃亡を企てたい誘惑にかられるが、勝手都合にも限界はあり、なんとか年内にと気を取り直して頑張る。切れ目なき世にも節目はやつぱり定めなのだ。

節目に思うのは、かつて人間が鳥獣虫魚を追い、お日様や雨水に神頼みする農村社会であった頃は、仕事と自然、そして生きることは同時進行であった。そこには季節を軸にした生存を基準とする生活リズムがあった。農繁期はもちろん、農閑期にはまた別の作業があつて季節に合わせ、また季節を問わず、汗水たらして働き通した。大晦日の日も暮れてやっと一年の肩の荷を降ろし、そして一息吐息、除夜の鐘を迎える。明けて、正月には晴れ晴れと休息し、そ

れなりの衣装をつけて初詣に行く。ぱんぱんと手を打って新年の新たな誓いの成就を願う。ハレとケ、身の回りに付いた不浄を払い、新しく清い気分になって再出発をする。そのような意味で大晦日と正月の両日は、その年のこし方にケジメをつけ、目標を新たにする特別な日でもあった。一年という季節の節目に合わせ我が身を振り返り、生き方なりを考える。

それは、胃腸と共に慢性低下しやすい人間の再生システムとして機能していたと思う。

しかし、今や仕事は自然のサイクルとは離れ、季節の変化に関係なく日常的に切れ間なく続いていく。またグローバル標準の時代では、季節的・伝統文化として繰り返されてきた節目も曖昧になり、その機能も衰退してしまった。これまでと違って社会人の節目においては、冠婚、レジャー、昇進、転職、など個人的な即物的出来事が節目として、ひと年の節目を上回ってしまった気がする。即物であるから、物がこなければ節目もこない。かくして大晦日や正月は日常と変わるこ

となく、特に心を動かすものではない。結果、「正月だからどうしたの」となってしまう。節目が曖昧になり、省みることなく、再生の仕組みの衰退した現代は、今や、何でもありの個人や社会、組織などの発生源になつていような気がする。「反省」とは、もはや映像の中、テレビでの猿まねが人間界に流行したが、猿化した人間を見て、猿が「猿にも反省」と言うかもしれない。インドでは、猿たすける猿が現れたくらいだから、猿も節目に成長したのだろうか。

誰が何を必要としているのか

反省といえ、社会福祉法人もまた新聞等のキャンペーンにより、反省なき社会福祉法人として批判を浴びている。黒字を貯めこみ、あるうことか社会福祉法人を売買する。あげくの果てに高額な役員報酬を得ているなど、ニュースになる事を数え上げればきりが無い。今や時代劇の有名な、あの越後屋も腰をぬかすほどの悪役ぶりだ。とうぜん社会福祉法人の存在の可否も含め、制裁的な改革議論が起こる。それ以外の肯定的な記事は今のところ見たことがない。厚生労働省がここに来て福祉法人の必要性を、危機感をもってよく頑張っている

が、そのこと事態がマスコミによって喚起される世論と、現実の社会福祉法人との間に、いびつ性が生じていることを示していると思わざるを得ない。

一般的に社会福祉法人の国民への知られ方は、障害者や老人施設ではないだろうか。よってこのふたつの法人が主に批判のターゲットになつていいる。しかし社会福祉法人は、病院、救護、生活困窮者、保育所、犯罪者の更正、市町村の社会福祉協議会などじつに幅広く、全国には、約20,000の社会福祉法人が存在する。性急に、また一面的な見方で結論づけてしまえば、改革ではなく社会基盤の破壊に繋がりがかねない要素を含んでいる。極めて社会全体に及ぼす影響が大きいとの視野に立つて解決されねばならない問題でもある。そのような視点こそが、この改革の国民視点としてもっとも重要なところだと思える。

また、実際に社会福祉法人の多くが黒字を貯め込み、法人売買をもちろみ、高額な役員報酬を得ているだろうか。新聞記事には日本全国に存在する2万法人という存在数が示されないままに、漠然とそのような悪徳法人が50箇所もあるなど、不特定多数の問題記事になつていいる。それでは読者は「50箇所も、おお、そんなに沢山あるのか」と思ってしまうだろう。

マスコミも別の切り口で、社会福祉法人の運用の仕組みには、毎年細部にわたる行政監査があり、社会福祉法人の留保資金は

福祉目的にしか支出することができない。

また法人の解散時は国に帰属するのが原則である。よって経営に困っていても原理的に不正や売買は不可能だ。高額な役員報酬など大方の法人では、とてもそんな余力すらない。施設の老朽化やニーズの変化に対応して、建て替えのための減価償却すら無い法人は数え知れずあるのが現実だ。殆どの理事役員は無報酬であるのが一般的な現状である。など、現実的な社会福祉法人のキャンペーン記事であれば、「おお、それは大変だ、寄付でもしよう」ということになるかも知れない。

批判される側の我々が叫んでみても勝ち目はないのかも、ペンは銃より強いのだから。そこはペンより強いおばさん達のパワフルなコメントでもあればと思う。かの、おばさん達は、姑、病人など家族の大変な介護や支援を担って、そうだったのだから、話せば分かりあえるかもしれない。

また、短気な発想で、それなら福祉施設全国一斉ストライキに突入とも言いたいが、現実化すれば大変な事件が続出するだろう。市場システムを導入した障害者自立支援法になって、あれだけの一家心中や子殺しが起こったことを忘れたと言うのだろうか。今でも続いているが、ニュース性が薄れたにしかすぎない。福祉施設には、「どういう人たちが、どういう必然性で利用せざるを得ず、どのように機能すべきか、機能しやすいようどう改革すべきか」の議論がない。経済界やマスコミのキャンペーンも、金目

の話に終始している。

社会福祉法人も、経済界もマスコミも、根本的に認識すべきは「誰もすぎて福祉施設を利用している人は一人もいない。」究極的な選択肢であることだ。本人は勿論、誰もどうにもできない生存性において、唯一の拠り所だからである。

一方、社会福祉法人も使命感をもって、「どういう人達が利用し」「その人達に何をしているのか」をもっと主張すべきだ。国の支給費が頼り「息をひそめ、ほとぼり冷めるまで」とばかり正当意見も言わずに黙っている。中には生きていくことさえ忘れ、国さえあれば大丈夫「何はなくても江戸むらさき」と眠れる法人もある。社会福祉法人の公的責任や、国家の福祉機能が衰退し、日本再興戦略による企業のための福祉規制改革でよいのだろうか。コストや利益追求で困窮する人々の問題が解決されるわけではない。このままでは、社会福祉法人は絶滅危惧種になりかねないのに。

支援とは人の魂に触れる事

「世は濁れり、我ひとり澄めり」とは、西鶴の好色一代男。このままでは、福祉法人は単にひとり濁れり状態にされかねない。しかし我々は、能力の差別により社会から

疎外され苦しむ人たちの権利の確立に向けて、自立生活が困難である人たちの尊厳の回復をめざして、H・スペンサーのいう「最高度の個性化は最大の相互扶助において共にあらねばならない」という、あるべき共生社会の構築に向けて努力する他に何をするというのだろうか。それなくして存在の意味をもたない。この一寸の虫の覚悟が「福祉マインド」と専門用語化される由縁だ。

また、正当な批判まで拒むものではない。社会福祉法人は、その制度において60年余りの長きに渡り、制度変化もなく同一制度で行われてきた。そのことでの硬直化は否めない。その根本要因は、社会福祉法人は本来、国が行うべきことを特別法人として、国との契約内容において業務遂行してきた。よって、国の支給費の支出根拠に定められた業務内容の範囲内でしか事業活動できない仕組みでもあった。

一方、そのような制約下にあっても、時代や地域のニーズ変化に合わせ、独自性のある事業展開をしてきた社会福祉法人も珍しくはない。硬直的な行政指導を受けながらも、突然変異的な試みが福祉未来の現実化を促したことも事実だ。また、福祉法人は衰退する地方にあつて唯一、確実な経営主体として、流出する若者の雇用の受け皿となり、残された老人や障害者を支え、地域のライフラインの核になっているところも沢山ある。この地域の人々の存在を支える確実な経営主体としての力も見直されて

もよいだろう。かつての「ふるさと創生事業」のような財源ばら撒きで、地方再生はできるだろうかと思う。

何より福祉支援は、支援や介護の直接現場だ。その人たちに寄り添う支援とは、その人たちの生存性の困難と人生に寄り添うこともある。人には魂がある。そこに触れる仕事は、そう簡単な綺麗ごとでは済まない。しかしそのような福祉現場で汗水たらし、頑張っている若い人々も沢山いる。人材難ではなく、社会福祉を目指す若者が増えていくような社会であれば、心豊かな社会になっていくだろう。新聞記事も、そのようなキャンペーンにならないものだろうか。それなくして共生の社会と云えど、そのような世の中は構築できないだろう。

節目に省みる。かく言う私も、西鶴の「大晦日さだめなき世の定めかな」に学び、この一年をふりかえり反省すべきは反省し、新年には晴れ晴れしく、新たな目標にパンと手を打って祈願しよう。そして書き初めは、こればかりは誰かにお願いする方がよさそうだ。自分でも読めないものなら、この一年、見るたびにめげそうだから。こは、ひとまず五分の節目に甘んじることにする。

放課後等デイサービス「2のあひる」 開設3周年を迎えました!

2011年10月の開設より、皆様の温かいご支援
ご協力の賜物と深く感謝申し上げます。今後とも
宜しくお願い申し上げます。

「2のあひるの由来」

2のあひるの名前は、あおはにの家アート班に所属する
利用者さんが描かれた絵画が由来となっています。
これは数字の「2」をモチーフにしたあひるの絵で、
青葉仁会設立当初からの利用者の方の絵画という事
もあり「初心を忘れないように」との思いが込められて
います。



地域便り



第

4 2回奈良県障害者作品展に
みんなで製作した作品を出しま
した。2のあひるの玄関に飾っている
ので見に来て下さいね。

青葉仁会をご支援下さった方々

敬称略・順不同

期間:平成26年9月1日～12月31日

会費	
二〇	中野明美 田名出隆芳 穂迫勉 エバオン前西佳信 西川雅与 八木順子 西岡哲也 井手睦子 福野有倫 鳥山久美子 井上祐子 山岡照代 乾幸介 松原保子 油野奈那子 近藤久 山本一樹 稲本信正 政影せつ子 政影裕作 市場喜徳 鈴木ふじ子 大野正碩 村田昌三 端本峯子 平木祐治 高原和美 高原恒信 飯田悌孝 葛城昇 玉川吉男 玉川節子 橋本俊博 田中一郎
一〇	濱田量一 濱田修一 鈴木忠男 米澤敏治 由岐透 東口美知子 楠田久和 小川靖子 東村昇 伊藤専一 大久保光人 斉藤勝子 清原郁子 藤原翔吾 中西賢治 三浦成男 溝川惺一 西勇夫 鎌倉光子 中山健 前川株式会社 永井弘美 森岡美好 石田邦男 藤原和彦 前川好治 篠崎雄爾 島田和信 満生朋子 周木孝治 米澤弘明 八木徹子
寄付	
二〇	林利法 大野加津子
一〇	大門美春
五〇	松野剛史
十〇	林光行
一万円まで	大津市富士見学区 社会福祉協議会 田中孝雄 倉森 信太三吉 山出哲史
十万円以上	若竹清 上杉洋 長堀橋同友会 湊打滋二 梅山秀樹 奈良バイロットクラブ 稲葉忠温

ご支援ありがとうございます 心から御礼申し上げます